

暑すぎる時代の養豚

①アニマルウェルフェアが生んだ意外な効果

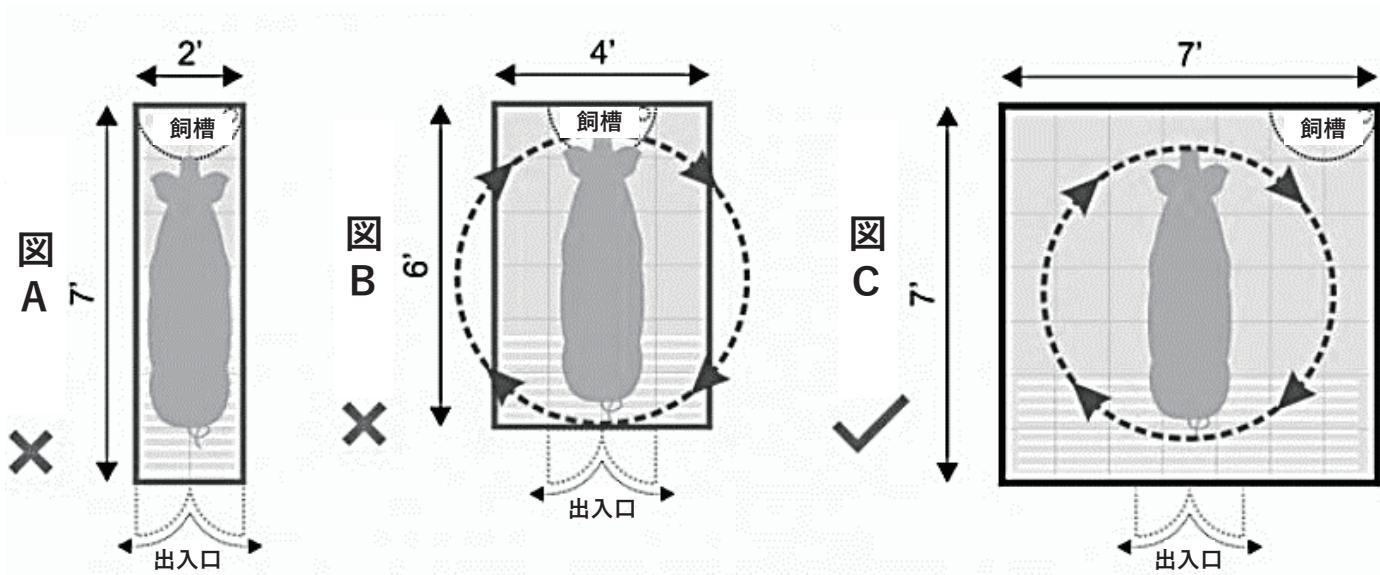
ハイノキ家畜診療所
古川 誠

「今年の暑さも異常気象といって差し支えない。昨年と同等、もしくはそれを上回る」—異例ともいえる表現で気象庁が言及するほど昨年に続いて厳しい暑さとなった2024年の夏。本稿を執筆している9月に入ってようやく朝晩は気温が落ち着く気配を見せ始めるものの、日中はまだまだ30℃を上回る地域も多く、「いったいいつになったら涼しくなるの」と遠い秋を待ち遠しく感じている方も多くいらっしゃるかと思います。気象庁によると今年の残暑は長引く見通しで、日中の気温差とこれまでの暑さで蓄積された疲労が相まって体調を崩す可能性があるため体調には十分注意する必要がありそうです。

汗腺の発達に乏しく汗をかいて体温を下げる事が難しい豚にとって人間以上に暑さは大敵です。気温が上がるどうしても食下量が落ち出荷日齢が遅れてしまうのは致し方ない面があるのですが、今年は災害級とも言える暑さの影響で母豚の死亡事故が相次いで発生したとあちらこちらで耳にしました(8月上旬)。普段はめったに母豚の死亡事故が起きない農場でもそのような話が聞かれたことからも、今年の夏の暑さがいかに異常であったかということが窺い知れます。異常気象の影響は日本だけでなく海外でも大きな問題となっています。アメリカではここ数年40℃近い熱波の発生が深刻な問題となっており、農業や畜産業にとっても大きな脅威となっています。そんな中、今年の厳しい暑さをほぼ何の影響もなく過ごすことができたという養豚場のマネージャーのインタビューがYouTubeで公開されています(「Cooling Off: Prop 12's Impact on Heat Stress Relief for Pregnant Sows」<https://youtu.be/8iJGImVr0aA>)。いったいどのようにしてこの“災害級の暑さ”を凌いだのでしょうか。

力ギとなったのはカリフォルニア州法第12号(通称PROP12、以下同)と呼ばれるカリフォルニア州が制定した州法です。同法は主に畜産動物の飼育環境、つまりアニマルウェルフェアに関する基準を制定するため2018年に有権者による直接投票により承認されました。PROP12は飼育環境に関する基準だけでなく、同州における販売にも基準を設けており、州内で販売される畜産物はその基準をクリアしなければいけません。つまりカリフォルニア州外の農場であっても、同州で畜産物を販売したい場合PROP12が定める基準をクリアする必要があるということを意味します。カリフォルニアは人口の多い一大消費地であり生産者にとって重要な市場である反面、厳しい基準を満たすためには施設の改装など多大なコストを負担しなければならず、生産者は将来の生産計画において大きなジレンマを抱えることになります。

生産者側からはマイナス面を懸念する声の大きいPROP12ですが、インタビューではPROP12のおかげで夏の暑さを乗り切れたと同法を評価しています。ポイントとなったのは飼育面積です。PROP12は妊娠中の母豚に対し、1頭あたり最低でも24平方フィートの飼育面積を確保するよう求めています。24平方フィートはメートル換算すると2.2平方メートルに相当し、これは日本の標準的な妊娠母豚用ストール面積のおよそ倍の大きさに相当します。現状の倍の大きさとなるとかなり広くなる印象ですが、PROP12はさらに厳しい制約を課しています。図A~C(次頁参照)にあるように24平方フィートさえクリアしていれば良しというわけではなく、母豚が自由に動けるスペースでなくてはならないとしています。



図A～C PROP12が定める妊娠母豚の飼育スペース例

図A：一般的な母豚ストールサイズ(14平方フィート \approx 1.3平方メートル)。PROP12が定める基準を満たしていない。

図B：ストールサイズは24平方フィート(\approx 2.2平方メートル)と飼育スペースについては基準を満たしているが、母豚の動きが制限されており基準を満たしていない。

図C：ストールサイズは49平方フィート(\approx 4.6平方メートル)。母豚は自由に動くことが可能で基準を満たしている。

引用元：https://www.cdfa.ca.gov/AHFSS/AnimalCare/docs/sow_housing_guide.pdf

つまり24平方フィートというのはあくまで最低限の広さであり、実質的にはさらに広い飼育スペースを用意しなくてはならないことになります。

飼育面積については非常に厳しい制約のあるPROP12ですが、この制約によって母豚同士の距離が広がることでお互いが発する熱や暑さから生じるストレスが大幅に軽減されたと先のマネージャーは分析しています。その効果は絶大で「以前は熱波のたびにホースをもって母豚に水をかけてなんとか体温を冷やす作業に右往左往していたが、PROP12に準じた飼育方式に変更後、40℃近い熱波があった今年の夏も死亡事故はおろかパンティング(口を開けて呼吸する行動。体温を下げる効果がある)をする母豚すら目にしなかった。全体を見渡してもストレスを感じている様子がまったく感じられず、PROP12を導入前の3年前と今の妊娠母豚の状態を比べると、“Night and day difference”(天と地ほど違う)」と述べています。いわゆる“薄飼い”にすれば暑さの影響が減少するのは自明の理ですが、施設の改装にかかるコストや出荷頭数のノルマ未達=売上減などの現実的な問題の前では「わかってはいるけど、そんなの無理」というのが現場の正直な声だと思います。しかし近年の異常気象は“待った”をしてくれません。温暖化現象やエルニーニョ現象など地球全体が気温上昇のトレンドに入っている以上、“損して得を取る”ことも視野に入れた新たな暑さ対策を検討する時期にあるのかもしれません。(次号につづく)